ECCE RES: ＜もの＞ 社会における ＜もの＞ の諸相
——キッチュ論ノート（4）——

浜下　昌宏

Summary

ECCE RES : A Variety of Facets of Things in the 'Thing-full' Society

Masahiro Hamashita

In this 〈thing-full〉 society, the following topics would be raised : how the flood of things has been brought about ; how is the correlationship between things and experiences ; to what degree discourses about a thing have effects on its image or representation ; what is the difference between thing and thingness, etc.

These topics are important because of the 〈thing-full〉 society, i.e. highly developed mass-consumption society. A superfluity of things has changed the style of recognising a thing, and has modified the ontological status of a thing ; then, in turn, things have set up a claim to independency from the control by human recognition. Ordinarily, we see a thing as a tool, as goods, or as a brand commodity, etc., and, if possible, we could try to classify the things. But an overwhelmingly excessive amount of things makes it impossible, so, as if lost in a flood, we must make way for reconstructing a new attitude to things.

Perhaps one way, by which we can get rid of our obsession with things, may be to see a thing as an 〈object〉 detached from its meaning already given, thus alienating the thing from our interests. But this way, once suggested by Marcel Duchamp, is out of date and ineffective today, so we must advance further to find a better attitude to things.

＜I＞

0. 物の氾濫

物余りが語られて久しい。販売が競争の前線となり，生産はすでに販売業績に左右されている。TV や新聞の報道で伝えられるソヴィエトの国営マーケットの売り棚に何も置かれていないことに我々は驚く。日本では，よほど意志を強くしないかぎり，商品の氾濫に我々は幻惑され，財布の紐ももものかは，クレジット・カードの限度を超えてまで購入の欲望を満たそうとする。たしかに，まず数量の点で，物に我々が出会うチャンスは圧倒的である。例えば，「チーム・デミ」は昭和 60 年の発売以来約一年のうちに 340 万個売れ，「コピージャック」は発売 10 ヶ月で 8 万台，浴室内で聴くラジオ「シャワーメイト」は年間約 3 万台，「シャンプードレッサー」はすでに 13 万台以上，といった数字を見ると，商品の氾濫のすさまじさがよくわかる。

そもそも我々の表現は，どこまで自分に固有なものによって可能なのか。裸の肉体，内面で知恵となっている言葉，表情，といったものを除けば，持ち物が自分の意思，自己顕示の表現となっている。イコノロジーにおいて人物像を同定する際，その人物の持ち物を手がかりとするように，さながらその人の持ち物によって人物・人格の如何を推し量るがごとき有様である。すると物の豊富さは自己表現の豊富な多様さを保証しているかのようでもある。しかしそれを多様さと呼ぶべきか，それとも単なる人格の拡散と見るべきか。

1. 物体験

新興宗教の中には，例えばオウム真理教のように，物にとり囲まれた生活を捨て，原始共同体のような自然の共同生活を説くものもある。所有を破棄し，物で自分の虚飾をかきたてる現代の主体性のなさを克服しようとするのであろう。物を捨ててシンプルな生活へ入れ，とは，世捨て人のための有効なスローガンにはなるが，しかし我々は現実から出発したい。つまり，物に満ちている自分の周辺を自分の目で確認することから考察を始めたい。物に包囲されている自分に驚くことが最初の体験となる。かつてベーコンやロックが，認識能力を教育するにあたり，言葉に代えて物の重視を論じたように，すなわち，言葉にすぎない形而上学に代えて経験的な観察から出発する方向を考えようとしたことを，我々も同じように踏襲することが出来るのではあるまいか。たしかに，物を見るときに我々は一定の了解の枠組みを必要とする。しかし，その枠組みがすでに古くなっているときに，むしろ大事にすべきは，物そのものが経験の対象となりうることである。

＜もの＞ に囲まれ，＜もの＞ の感触に満たされ，我々の知覚に欠落の空白部はない。空虚への恐怖感（Nature abhors a vacuum.）が生まれることはない。＜もの＞ はその可視・可感性ゆえに安心感をもたらす。たとえば，ある散財をしても，それによってなんらかの ＜もの＞ を購入したのであれば，その出費は財の形を対象的に残すわけであり，ある種の確実さ・確かさの思いを呼び起こす。一度きりの現場体験である，芝居を見ることより，芝居の醍醐味がわ

からない者には，ヴィデオ・テープという ＜もの＞ の方が良いのであろう。

ヒトは苦痛の，欠落の喜びを失い，絶えず充足・満足・安楽を求め，いわば小児の快楽に堕してきた。

2. 表象・ディスクールから物へ

物が過剰になることにより，その結果，生活における行動が物（道具・利器）と関わる割合が増えるにつれ，使用行為も過剰になり，物を観察することが疎かになる。物を改めて考えていては使用に際しエコノミーの原理が廃されてしまうからである。そこで，物をさまざまな連関や意味の点で捨象して，単なる機能的存在，ないしは物的実在としてのみ捉えて，生活の効率化を図らねばならない。現代の生活に順応するために，無意識的に物を，対象的なオブジェとして解することが要求される。オブジェとして，物が情報や記号の単位となりえて初めて，物を全体の構図から剝離し，さまざまな組合せ・組み替え可能なディスクールの操作対象とすることが出来る。

普通我々は物を直視しない。当然といえばそれまでだが，要するに，シンボルを操ることで，複雑な歴史的・文化的・社会的な，経済・権力構造の中を生きざるを得ない人間は，シンボルを媒介する言葉・表象・ディスクールを通してのみ，物と接するのが普通である。そしてまた，物もそれらに従属する形で存在する。ところが，物が自立してきたのではないか，というのが本論の出発点である。言葉・表象・ディスクールから物が自立するということは，物が人の直接体験に関わり，まず知覚において物との関係が始められることを意味する。しかも，その知覚に際して，予断があれば，以前と同じ表象に拘束された認識しか生まないが，物そのものの先行性という条件の下での知覚は，前提の予断・表象・予備知識の崩壊へと通じている。これらの事態が意味するのはどのようなことか。物が多量かつ多様に産出されるあまり，人の側で，認識が追い付かなくなってしまったのだろうか。それともただ，旧来の認識の枠組みが古くなってきただけであって，新たな枠組みが求められているのだろうか。

3. ＜もの＞ と ＜こと＞

ゲシュタルト心理学の構図である図と地という対概念に対応させてみるならば，＜もの＞を図とした場合，地は ＜こと＞ である。つまり，＜こと＞ という状況を前提として ＜もの＞ という意識的・指向的対象が特定・定立される。このような捉え方は，物を絶えず関係・状況・文脈のなかで初めて理解するという見解に基づく。鉛筆が地面に落ちていたとき，我々はそれを見つけて，それが場違いな所にあると理解する。つまり，ある物の縁語は，鉛筆であれば，消しゴム，ノート，黒板，机，等々が挙げられるであろう。そうでなければ，地面の鉛筆は，場合によっては凶器であり，ゴミであり，棒切れにすぎない。また，＜こと＞ は ＜もの＞ の「働き」「作用」「状態」「様態」「性質」「関係」であり，＜もの＞ が単語（複合語も含む）で表されるとすれば，＜こと＞ は判断・命題・文によって表現される。では，＜もの＞ は個体と同義と考えてよいのか。たしかに，命題の項を成す点で，個体の場合もあり得るが，しかし，集合名詞で考えられる物もあるのだから，要するに命題を構成する単項と捉えておけばよ

い。とまれ問題は，今日 ＜もの＞ は ＜こと＞ との関連から離脱しつつあるということにある。

4. ＜もの＞ と情報

＜もの＞ は ＜こと＞ との相関によっ知覚対象となるだけではない。それは，単に知覚風景の変容によるだけでなく，いわば ＜こと＞ 概念の拡大といってもよいが，＜こと＞ が現前的知覚を超えて，情報という可能知覚対象をも取り入れるようになるからである。＜もの＞ は情報の実体部分として，情報を検証する事実の役割をはたす。しかも，物と同様に情報も氾濫しているがゆえに，＜もの＞ については自由なディスクールの可能性が無限に開かれている。

5. 物と認識

物は自存しているのだろうか。たしかに，私がこの世から消えても，物は依然として残っているであろうし，また，私がいま見ている物から目をそらしても，その物が消えてなくなるわけではない。しかし，少なくとも我々の生という観点からは，ある物が自分と無関係に存在しても存在しなくても，自分にはどうでもよいことである。大事なことは，私がその物を見ていたり，所有したりしているということである。つまり，物は私の関心によって初めて私と関係を持ち，その意味が問われ始める。だから，古来，物そのものを問う哲学的な探究がほとんどなかったのは当然であった。物の観念を，人間的意味から引き離す意味で定立されるようになったのは，デカルトあたりからではないだろうか。もっとも，彼の場合も，心・思惟や身体との関わりで物が中立的に考察されたのであろうが。

6. ＜もの＞ ・ ＜物＞ ・ ＜オブジェ＞

＜もの＞という表記はいささか思い入れが込められ過ぎていて，それでいて概念規定があいまいであるという欠陥がある。カタカナで ＜モノ＞ と書いたりもするが，いずれにしてもファッドの雰囲気を持っている。日本語であいまいのときは欧語で考えてみよという原則を生かせば，＜もの＞ に相応する語は何か。＜thing＞ ＜goods＞ 等を思い浮べてもよいが，我々が言わんとするより近い言葉は ＜object＞ である。では，最初から ＜オブジェ＞ と書いてもよいところであるが，それはまた別の意味合いを持ってしまう。とはいえ，＜オブジェ＞ としての ＜もの＞ を考えるに際して，我々は確かに，美術史上の概念である ＜オブジェ＞ の意味をふまえている。すでにデュシャンにおいてほぼ確立された ＜オブジェ＞ の意義とは，機能をはじめとする物の意味が遊離して，他方で知覚主体の生活感覚が疎外され孤立されるのと並行しながら，形として，さらに存在そのものとしての物が不気味に異形の相貌を呈しはじめ我々を囲繞していることに気づくということである。その際の物とは，自然がその恵みで人類に豊かに提供してくれている事物ではなく，スーパーマーケットやデパートにおいて充ち満ちているのを我々が日常的に見ることのできるところの物である。まずは具体的な個物であり，知覚の対象であり，手触りの道具・商品・利器を指して，物と呼んでおきたい。

7. ガジェット

芸術と非芸術，芸術と日常世界，純粋芸術と応用芸術・コマーシャルアート，その間の境界がいよいよ不明になっている。生活世界の事物の必要条件である機能が，芸術の助けを得て洗練・装飾されていくのであるが，そのバランスを超えると機能不明の事物となる。商品が擬似芸術品となる。また，それによって商品価値を高め，さらなる ＜もの＞ の氾濫を促す。ガジェットは ＜もの＞ が自存自立していることを示す範例である。

＜Ⅱ＞

8. ＜もの＞ 社会の展開

＜もの＞ 社会の展開への転轍器のようなキーワードは何か。まず1960年代から見ると，「ミニスカート」や「ジーンズ」に注目したい。それらは，大衆社会のレベルで“着る”ことが自己表現となり，他人の眼による批評を恐れるより自分の好み・感覚・便宜を優先する態度を象徴している。次に，即席ラーメン，だしの素，レトルト食品等の「インスタント食品」は，“食”を味わうとはとても言いがたいものの，“食材”として生きつなぐに十分であり，その手間暇で空いた時間を別の経済活動ないし趣味の時間に回すことを可能にした。物の機能性を，その可能的機能まで発揮したといってもよい。たしかに，即席ラーメンの麺も，その汁に浮かぶ油も，とても栄養価があるとは思えないが，＜物＞ を食べて空腹をいやすという気分を十分に知ることはできる。また，洗濯機，電気掃除機，そしてテレビ等の家電の普及は，文明生活の恩恵を如実に感得せしめ，工業およびその生産の実際的価値を認めさせた。その結果，さらなる物の生産は時代として必然的なもの，と一般に了解されるようになる。つまり，生産至上主義肯定の気分が風潮となる。

1970年代に入って，ファッション産業が全盛を迎える。戦後生まれのいわゆるニューファミリーが，ダブル・インカムという生活様式とともに，気軽に外食をし，「外食産業」も盛んになる。そのような気軽さは，かつては外での買い食いや歩きながら何かを食べることは親から厳しく禁じられる躾もあった時代を忘れさせ，束縛の無い，いわば幼児性を伴った便利さとあいまって新たな生活態度の一要素となっていく。それは，アメリカニズムの浸透（汚染）の一側面でもある。街頭の「自動販売機」の普及と氾濫は，そのような生活態度をさらに助長した。また，「百円ライター」「クオーツ時計」「電卓」など，安価に購入できる商品の開発は，かつてそれらの商品に付きまとっていた，高価さやブランドものというイメージ，ハイカラさ，高性能の機能，といった概念を打ち破り，一挙に使い捨て文化の時代を切り開いていくことになる。また「ウォークマン」のヒットは，まさに現代人が一つの行為に集中しないこと，いわゆる“ながら族”が普通の生活態度になったことを端的に示している。たしかに，歩きながらだけでなく，とくに電車やバスといった交通機関の中での「ウォークマン」の着用は，一方で，都市の発展と共にそれだけ通勤・通学時間が増え，その時間を人々がもてあましていたことを意味している。「ウォークマン」に代表されるアイデア商品が，さながらいわゆる“すき間産業”，“便

利屋”の商品版のように，次々と巷に現われるが，その見本市のデパートとでも呼べるのが「東急ハンズ」であった。

1980年代はまず「竹の子族」と呼ばれる風俗現象に注目したい。彼らにおいてすでに“らしさ”というようなものが放棄され，表現のアナーキズムが蔓延している。「スポーツウェア」はファッションとスポーツの両面の，つまりおしゃれと運動との二重性が備わっていて，これもまたシンプルさを認めないひとつの傾向の現れでもある。眼鏡にも視力の矯正を意味しないファッショングラスが登場し，水着も水泳用とビーチファッション用との混合が顕著に見られるようになる。「コピー食品」はグルメブームを利用してさまざまに生産され，物の同定も関心から離れ，見かけとうわべだけで形が整いさえすれば，すべて商品・物となった。レーザーディスク，ワープロ，ファミコン，パソコン等のハイテク機器が容易に家庭に入り，人は簡単に技術者もどきに振舞えるようになった。

そして1990年代は，改めて反省の時代としておこう。

9. 意識対象としての＜もの＞

日本語における＜もの＞の意味には，物と者との両方の漢字が当てられ，物体を指すとともに人格をも表す。さらに，「物の気」「物狂い」といった言い方には，超越的な神的・鬼神的存在者をも指す場合があることを教えてくれる。一方，ヨーロッパの言語では，感覚的な物体，事柄・事件・事情・さらに神のような不可視の存在者も指す。感覚的物体を除外すれば，特定しがたい，それでいて超越的で摑みがたい存在を指している。ドイツ語のDing，英語のthing，フラン語のchose，どれにもそれらの意味は共通している。さらにさかのぼってラテン語のresについてみてみると*，それは動詞reor（考える，信ずる，想像する，評価する，判断する）と共通の語源を持ち，ギリシャ語の*ῥέω*，その名詞である*ῥητός*，*ῥῆμα*等と関係する。ということは，resは，語られた言葉・物を意味し，思惟されているものごと，話題にされているものごと，関心の対象を指している。意識の指向性によって捉えられた＜もの＞は，おそらく現代特有の物ではなく，人類共通の精神の在り方と相関するものであろう。

＊cf. 上妻精「ものとは何か――序論的考察」『実存主義』第61号（1972年9月）

10. ‘侍女の嘲笑’に抗して

ハイデッガーは『物への問い』*の冒頭，‘物とは何か’という根本的な問いの行きづまりを示唆し，その因惑が，かつて哲学者タレスが天体研究に没頭するあまり井戸に落ち，侍女の嘲笑を招いた逸話と同じ事態を指すと考える。たしかに，物という言葉の多義性ということもあり，この問いでは一歩も先に進むことはできない。そこでハイデッガーは物の三つの意味を次のように区別する。1，目の前にあるものという意味における物。例えば，石，木材，やっとこ，時計，リンゴ，パン。それら無生物ばかりでなく，さらに，生物である，例えば，バラ，灌木，ぶな，もみ，とかげ，雀蜂，その他。2，前記のこれらの物が思念されているという意味における物。例えば，‘物を処理する’‘物にする’等の言い方に示されるように，それには，計画，決断，思慮，行為，歴史的事件，等々も加えられる。3，これらすべてと，それに加えて何かあ

るものであって無ではないところの他のすべてのもの。例えば，カントの‘物自体’など，人間には経験によっては近付き得ない，神のようなものも指す。そのうち，ハイデッガーは1の意味を拠り所とするが，我々も原則としてまずその意味で＜物＞を捉える。つまり，我々の回りの諸物，最も近くにあるもの，手でつかみ得るもの，としての物である。この立場は，ハイデッガーによれば，侍女の嘲笑から学んだ結論になるが，我々もまた，侍女と同じ意識から出発する。

しかも我々の立場は，今日の侍女のそれである。消費社会のめくるめき変動の波の中を，黙々とかしずく侍女のごとき立場である。その時，周囲にある物とは，石や石材，バラやとかげよりも，むしろ身近なものは，電子レンジであり，ファクシミリであり，ワープロ，コードレス・テレフォン，等々であろう。

＊cf. 木場深定，近藤功訳『物への問い』（ハイデッガー選集27，理想社，1979）

11. 商品としての物

我々が生活するための糧を得るために，より具体的には，貨幣経済の社会で財貨を得るためには，なんらかの商品価値のあるものを市場に出さねばならない。すなわち，いずれかの他人にあって，利用・使用価値があり，それ故に交換価値を持った何かを提供することが大前提である。その時，いちばん具体的なものは，言うまでもなく＜物＞である。我々は物を売ることで財貨を獲得することができる。物以外に商品価値のあるものは，状況次第であってそれを必要とする者がいなければ「商品」とはならないが，例えば，サービスであり労働であり，芸，技術，才能であり，また気分を売ったり，場合によっては自分の肉体を「売る」こともできる。こうして，「商品」という面からも物を見ることができる。

しかし改めて考えてみると，単純再生産の生活である限りでは，Aという物とBという物，あるいはCというサービや技術などと交換していてもよいが，さらなる利潤を上げるには（剰余価値を得るには），Aという物の価値をBと等価交換するのではなく，B以上の価値を有するXと交換できるようにしなければならない。たしかに，生産力と消費がある程度限られた社会では，物の価値は需要と供給との関係で決定されていた。その際，Aの商品価値を高めるには，ひとつにはAの生産量を抑えればよい。しかるに，物やさまざまな商品の流通が過剰な社会では，Aの価値を高めるためには恣意的な配慮を施せばよい。つまり，そこにデザインや宣伝，要するにAをめぐるディスクールの工夫が要求されている。その結果，物の価値はディスクールの成功と共に上がることになる。しかし，そのディスクールとは，有り体に言って，人を騙すためのものである。（それもまた付加価値と呼べるだろう。）物そのものには虚偽の罪はないが，物に人間的要素がより多く付着する分だけ，物は人騙しに関わってくることになる。

12. 物の分類・系譜学

物は溢れながら，果たしてどのような系譜を成していくのか。製品段階では，例えばある煙草の銘柄のように，「セブン・スター」から「マイルド・セブン」が作られ，さらに「マイルド・セブン・ライト」，そして，「マイルド・セブン・スーパーライト」，「カスタム・ライト」，

等と新製品の系列が作られている。ジャン・ボードリヤールは物の分類の可能性について，懐疑的ではあるが示唆している*。「急速に変わって行く物の世界を分類して，それを記述する体系を作るなどということが期待できるのだろうか」と言いつつ，分類の尺度を試みに挙げている。それによれば，物の大きさ，機能の程度，付随する性質，物の形，持久の程度，制作の日時，その物が変化させる材質，さらには，「(自分のためか，家族のためか，公共のためか，どうでもよいものかという）物を使用する場合の排除性（exclusivité）または社会化の程度」などが基準となりうるとされる。このような発想には我々も共感したい。物が過剰になっていく社会にあって，場合によっては自然や他者との関係より物との関係の優先性が考慮されねばならない社会にあって，改めて物を注目し，物の系譜を整理する必要があろう。ボードリヤールはさらに次のように言う。「技術が産んだ物の叙事詩は，技術の変革とつながっている社会構造の変化を物語ってはいるが，次のような問には答えていない。それは，物はどのように体験されるのか，物は機能するという要求以外のどのような要求に応えているのか，どのような精神構造がどのような機能構造とからみ合い，互いに矛盾しているか，物を体験する日常性は，どのような下位文化・超文化（transculturel）といった文化体系に基づいているかという問いである」。——そこから，彼は「物の ＜語られる＞ 体系の研究」を目指すのだが，それは要するに旧来の，物を意味連関のなかで位置付けようとする態度であり，ディスクール次第で物という世界の見方を捉え直そうとする志向といえる。たしかに，パラダイムを変えれば世界の見方も変わってくるが，しかし，そこはあくまでも人間の賢しらの限界の追求がなされているに過ぎず，＜物＞ が人間の関心・視線への従属から，次第に独立・自立していく経緯は不問に付されている。

＊cf. ジャン・ボードリヤール『物の体系』（宇波彰訳，法政大学出版局，1980）

12. ブランドとしての ＜物＞：腕時計のケース・スタディ

ブランド商品のカタログの記述も興味深い*。どれがどのように優れていて，選ぶ場合にどのような基準を立てればよいのか，消費者への説得に工夫を凝らしている。その説明を子細に検討してみると，それぞれの物はそれなりに他との違いを強調されている。例えば腕時計に関して，ROLEX はオイスターケースによる防水機能を備え，スポーツ・ウオッチの先駆けとして人類の冒険をサポートしてきた。“ロレックス神話”の始まりは 1926 年 8 月の女性スイマー，メルセデス・グライツによる，ロレックスを腕にはめてのドーバー海峡横断にあるらしい。OMEGA はその精度，耐久性において，苛酷な状況でも機能を持続する強さが評価の対象となる。第 2 次大戦における英・米両軍隊の正式備品として採用され，さらに，「スピードマスター・プロフェッショナル」は 1969 年，アポロ 11 号による月面への人類初の着陸に際し，NASA の採用した，もっとも耐久性に優れていると評価された時計であった。宇宙飛行士に愛用されることでその評価も一段と上がったのである。PATEK PHILIPPE は装備する機能の豊かさで究極の時計と呼ばれる。月齢，永久カレンダー，クロノグラフを備えていて，複雑なメカニスムが人を魅了する。さらに機能面だけでなく，デザインにおいても，金細工，鎖，エナ

メル装飾，宝飾その他において際立っている。VACHERON CONSTANTIN の歴史は，精度において，デザインにおいて，共に一級の評価を受けてきた。時計のケース，針の動き，手巻仕掛けながら薄さを保っていることなど，最も古い歴史を誇るのみならず，絶えず職人的な知恵による配慮と調整の結晶である。BREGUET の製品ひとつひとつには，製造上のデータとしてケース番号，機械番号，文字盤の仕上げ方，調整時の詳細なデータ，製造職人の名前等の記録が残されている。自動巻時計，永久カレンダーといった装置の先駆的な開発が，まさにその名にまつわる栄光のブランドというイメージを定着させてきたといえる。アブラアン・ルイ・ブレゲは19世紀初頭における最先端技術の集大成の場であった航海において，彼の時計が評価されることをめざし，ついには海軍御用達（HORLOGER DE LA MARINE）の名誉を得たのであった。5気圧防水を施し，耐水性と18Kのシンプルなデザインの「ブレゲ・マリーン」は，そうしたブレゲの歴史と栄光を担ったスポーツ・ウォッチである。AUDEMARS PIGUET は，薄くて精妙な細工が施された文字盤フレームの美しさと，すでに1915年に作った「グラン・コンプリカシオン」に象徴される超複雑時計の技術の高さで名高い。またダイヤモンド針を使った時計もあり，宝飾品としての時計という観念も作り上げている。IWC（International Watch Campany）は1882年以来の製品について，照会番号，ケースナンバー，出荷日，納入先等が記録されていて，持ち主が変わっても，その時計についてのデータが得られるようになっている。「ダ・ウインチ」は1987年に発表され，自動巻のクロノグラフ，2499年12月31日までプログラムされた永久カレンダー，月齢つきの複雑時計である。単に企業名としてブランドというばかりでなく，職人的に凝りに凝った製品によっても話題を作り，その製品をさらなるブランドとしていくのである。LONGINES の活躍は，F1レースやオリンピックの公式時計として見られるように，品質の均一性を確保しながらの量産によって示されている。「アワーアングルウォッチ」の3つのダイアルは，それぞれ，時刻と経度，秒針のセット，均時差の調整を図るものである。「コンクェスト・ウォッチ」はチタンを使って軽量化を図り，デザインも機能本位に完成度を示している。JAEGER－LECOULTRE は竜頭巻時計のロッキング・バーの発明（1860年頃）や機械製の歯車の発明（1850年頃）により，さらには旧来の手作りから脱皮した機械生産技術の開発により，絶えず時代に先んじてきた。1903年には厚さ1.38ミリという超薄型の懐中時計を製作し，さらには，精度をうたうばかりでなく宝飾時計，ドレス・ウォッチ，耐震装置付きの腕時計，等と，新たな装置の工夫を精度，デザインを犠牲にすることなく続けている。

こうして見ると，ブランドと呼ばれる物は，機能，デザイン，伝統を条件とするが，さらに，有力な顧客の存在も，その名を高めるのに貢献している。例えば，ROLEX にはドーバー海峡を横断した女性スイマーのメルセデス・グライツ，ヒラリーをはじめとする1953年のイギリスのヒマラヤ遠征隊によって選ばれた歴史があり，OMEGA にはアポロ宇宙船やスペースシャトルなどの NASA の宇宙飛行士たちに愛用されてきたという栄光があり，PATEK PHILIPPE の愛用者には，ビクトリア女王，チャイコフスキー，アインシュタイン，クラーク・ゲーブル，ウォルト・ディズニーなどがいる。このような顧客たちが，製品の宣伝に一役も二役も

買っていたことは確かであろう。現代のスポーツ華やかな時代にあって，スポーツ製品の会社がアドヴァイザリー・スタッフと称する人たちと契約し，自社の製品，自社のネーム入りの帽子，シャツを身につけてもらうことで宣伝を図ることとは数量の点では比べものにならないとしても。

＊cf. 西尾忠久『新世界の有名品』(みんと，昭和52年)；土居輝彦編著『機能する道具・傑作品』(グリーンアロー出版社，平成1年)；モノマニア倶楽部編『世界の一流品わらっちゃう事典』(KKベストセラーズ，1990)；『インプレッション』平成3年4・5月号（アメリカン・エキスプレス・インターナショナル・Inc. ジャパン）

13. 物と性

物には人間の性別と関わる側面がある。用途により，年令，職種，性別といった区分けが出来るのは当然であるが，我々の関心は，時代の発明と思われる物と性の役割との関わりである。例えば，昭和59年12月の発売以来大ヒットした「ティームデミ」(プラス）が新人の女子社員のアイディアから生まれたことはよく知られている。鋏，ホッチキスその他の本格的な文具7点を，コンパクトな大きさで作り上げ，手のひらサイズのケースに収めた，ミニステーショナリー・キットという発想は，実用性・堅固さといった従来の発想では生まれなかったであろう。それが主としてプレゼントとして売れていることからもわかるように，その可愛さ，優雅さが魅力の第一義をなしている。女性の，しかも，社会的な権威・基準からの重圧から比較的逃れやすい，若い女性の着想による製品である。

また，1990年2月に発売された，フリーハンドタイプのヘアドライヤー「自由の女髪（めがみ)」(シャープ）も，女性プロジェクトによる成果である。働く女性が増え，しかも身だしなみとして，朝シャンという言葉が示すように，髪の手入れに時間と神経を使う時代の産物といってもよい。

14. 機能・用途・効用

物を機能の面から見るのは，物の製作理由・存在理由の基本は物の機能性にあるのだから当然であるが，仮に機能を停止したならば普通は破棄するがそれでも保存しておこうとする場合は，その物を機能の面から見ることを止め，形や思い出といった面で捉えるからである。しかし，機能についてもまた多角的に見る必要があろう。例えば，自動皿洗い器は，たいていその機能は皿洗いの手間を省くことにあるとされるが，一面では，洗う際に手で洗ったときによくあるような，皿を割ってしまうことを防ぐことも機能の一つと考えることも出来る。このような，機能への複眼的発想は，製品開発でも生かされている。例えば，「ママレモン」は，単に洗剤という衛生面での機能だけでなく，“お肌にやさしい”といううたい文句に示されるように，手荒れを防ぎ手を守るという美容の面，さらにまた，レモンのような香りをさせるという感覚的快をも機能としてもつ。

15. 物と行為

生活の各場面における物と，それに関わる行為やサービスがある。音楽では楽器という物があり，演奏者に合わせた製作，調律，修理・整備というサービスがあり，料理においては，調理器具，台所用品という物があり，実際の調理という行為がある。美術では，画材という物があり，キャンバスの組立，絵の具の調合という行為を必要とする。生活の科学としてのホーム・エコノミックスは，人と物との関係の科学とされる。そのような，物と人との調和のとれた共存関係，物とそれが本来的に要請する（さらには新たに養成していく）人の行為との全体性は，節度があって過剰や疎外を抑える幸せな文明社会を形成する。たしかに，実際の生活者による調和感覚や節度は，いつの時代にあっても，資本主義の論理が展開する過剰な物余り社会への健全な抵抗の原理たり得ている。しかし，生活者の側で生活の新しい形態（夫婦共稼，子供のアルバイト，主婦のパート勤務など）を創出するにつれ，生活の道具への反省の機会と時間は減り，物を以て（お金を以て）すべての生活の基軸とするようになる。その時が，危機というか，あるいは新しい生活の可能性を切り開く時期であろう。そしてその時，物が新たな様相を見せるようにもなる。

16. ＜モノ＞ ＝オブジェへの視点

＜モノ＞ への注目はどのようにして生まれてきたか。生活上の必需品である ＜もの＞ は，意識の対象として客観化される以前に，自明の存在であるはずであり，道具的理性の対象として操作される道具的存在を，その存在論的特徴としてきたはずである。しかるに，高度消費社会は，その「高度性」の意味を「物余り」と解してみると，必要量以外の物を，あるいは，十分に主体の選択に任せられる程の余裕量のある物を，冷静に観察・考察することを可能にした。しかし，冷静さを維持するにはある程度の限度というものがあろう。量の面からの過剰は，限定量の間での選択判断という人間的要素（human factor）を後退させ，いわば判断力をマヒさせるほどに，＜もの＞ が人間との関係を離れて，物がその存在を圧倒的に主張し，＜モノ＞ そのものという側面を浮き彫りにすることになった。かくして，＜もの＞ に対して半ば無人称化した存在となったヒトは，＜もの＞ の氾濫に幻惑され，我を忘れ，興奮するばかりである。人が判断力を失っている例として，贈り物という行為の非主体性を挙げておこう*。本来的には贈り物をするという喜びは，相手の喜びを想像し，品物を相手に合わせて，十分時間をかけて選ぶことにあった。ところが，儀礼と形式に則った社会習慣に堕した贈与行為には，人間関係の基本を捨象する消費社会の論理がすでに入り込んでいる。つまり，物の氾濫は進物用商品をすら市場に進出させている。何を贈ってよいかわからなくなった人たちのために，見方を変えれば，本当は贈る気持ちのない人たちのために，サービスを兼ねて作り上げられた商品は，相手に贈るというより，後の処理はお任せしますという，いわば投げ遣りな気持ちに即している。「外界の物の温かみに触れて始めて順調に成長するある種の能力がある」（アドルノ） のだが，

今日では当然そのような能力は開発されぬままであろう。

＊cf. T. W. アドルノ『ミニマ・モラリア』(三光長治訳，法政大学出版局，1979)

17. 物への態度

物を＜もの＞として見る（＝＜モノ＞とする），とはどういうことを意味しているのか。まず，物に関わる意味連関の中からその物を，ある意味で救出し，孤立化させた上で，いわばペルソナのごときものとして対処するということを意味している。しかし，存在そのものとして現われた物は，ロカンタンが木の根元を見て嘔吐したように（サルトル『呕吐』），グロテスクな異形性を前面に現わすであろう。つまり，人は意味付与において物を自己の世界に取り込んでいたのであり，意味は，物が異物とならぬための安全弁の役割を果たしている。しかるに，物との関係において疎外が生じたとき，人は物との疎遠を感じ，感情はその物へと投影せず，物との対立・対決が余儀なくされる。この場合を仮に，実存的＜モノ＞観と呼んでおこう。あるいはまた，物が過剰になり，基本的な生活に必要な物が満たされ，余剰部分で人間の側の態度決定が絶えず迫られるようになると，意味付けの範囲が拡大し，意味の視点も多様になる。ごく自然には機能の点で物を見，その存在価値・利用価値を見るのだが，さらに物が豊富になり選択の幅が広がると，装飾・顕示的側面からも見るようになる。例えば，ソファを買おうとするとき，すでに前提として，住まいのなかでベッドは足りていて，しかもソファを置いてくつろげる空間的余裕があることを意味している。そして，さらにその選択に際して，価格・安定性・心地よさの面だけでなく，デザインのよさ，自分の好みを満たすこと，置くべき部屋の雰囲気との釣り合い，他人に見せるときに自己顕示（財力や趣味など）に貢献できるか，等といった視点も立てられるようになる。しかし，そのように視点が立てられる自覚があれば問題はないが，物が氾濫し，それぞれの視点で選択の基準が混乱するほどになると，人は物に振り回されることになる。どの物も機能の点でも，デザインの点でも，価格その他の点でも甲乙付けがたくなる。無論，その先の決定は，販売者の側の努力に依ることが多いであろうが，人が識別の権利と能力を放棄した時点で，物は物としての相貌を主張するようになる。この場合の物を物として見るというのは，物の側から人に迫った結果といえるであろう。我々が本稿で問題にするのも，このような高度消費社会の副産物としての物の見方である。ボードリヤールの表現を借りれば，「自然の秩序の終わり」(『物の体系』）の時代を問題にするわけである。

18. 物と＜モノ＞の時代

「安楽」に対立する概念はなにか。「壮大」かもしれない。また，「美」も安楽の犠牲のうえで成立することもある。一方，「安楽」の親類語は，「平等」「放縦」といってもよい。「男たちが（やや遅れて女たちも）無作法に手足をのばして座れる安楽椅子やソファは，民主主義が確立し，社会のなかで中産階級の占める割合が増大し，世間から礼儀作法が消えうせ，女性が解放され，親が子供にきびしくすることがなくなってからの産物である」(A・ハクスリー「らくな暮らしということ」横山貞子訳)。それぞれの物も，そして＜もの＞も，時代の美的・倫理的・世相的範疇のなかに位置付けられる。我々はいつまでも「物におそはるるやうにて」(『竹取

物語』）とばかり途方に暮れることなく，物と＜もの＞を通して時代と人の行方を見いだすように求められている。

〔本稿は神戸女学院大学研究所1990年度研究助成金による研究成果である。〕

（原稿受理1991年４月19日）